



深谷の滝（備前市）

～ 衛 生 情 報 ～

- □蹄疫とランピースキン病の侵入を防ぐ!!
～グローバル化した現代だからこそ危機感を持つべき2つの伝染病～
- 豚熱ウイルスを持ったイノシシが農場の近くにも生息しています
- 「ダニ」が拡げる蜜蜂の病気
～蜜蜂の伝染病が増えています～

～ そ の 他 ～

- 抵抗性牛を活用した牛伝染性リンパ腫対策
- 新規採用職員を紹介します!



岡山県マスコット「ももっち」

<連絡先電話番号>

農林水産部畜産課 : 086-226-7431

岡山家畜保健衛生所 : 086-724-3880

井笠家畜保健衛生所 : 0866-84-8221

高梁家畜保健衛生所 : 0866-22-2077

津山家畜保健衛生所 : 0868-29-0040

農林水産総合センター 畜産研究所 : 0867-27-3321

《発行》岡山県農林水産部畜産課

<https://www.pref.okayama.jp/page/detail-26074.html>

記事を
掲載しています



口蹄疫とランピースキン病の侵入を防ぐ!!

～グローバル化した現代だからこそ危機感を持つべき2つの伝染病～

はじめに

口蹄疫はひとたび発生が起これば畜産業に甚大な被害を与えることが想定されることから、家畜伝染病に指定されている伝染病です。またランピースキン病は令和 6 年に国内で初めて発生し、その後、家畜に与えるダメージや防疫の難しさから、届出 伝染病から家畜伝染病に引き上げられました。

この 2 つの伝染病は近年、近隣国での発生が続いており、また人流や物流がグローバル化した現代においては、リスクが非常に高まっています。

特徴的な症状

口蹄疫は牛や豚などの偶蹄類の伝染病で発熱や食欲不振に始まり、泡状のよだれを流したり、口、蹄、乳房に水疱（水ぶくれ）ができるのが特徴です（写真 1）。感染畜は水疱ができる前から口蹄疫ウイルスを排出するため、病変を発見した時には群全体に感染が広がっています。家畜同士の接触による感染のほか、空気や風によりウイルスが伝搬するので、爆発的に感染が広がります。

ランピースキン病は牛や水牛の病気です。死亡率は 1～5% と高くはありませんが、皮膚に特徴的な結節を形成するほか（写真 2）、発熱、乳量の減少や四肢の浮腫等により生産性が低下し、経済的被害が大きくなります。主な感染経路が吸血昆虫による媒介であることが防疫を難しくします。



写真1 口蹄疫の病変
(農林水産省 HP から)



写真2 ランピースキン病の病変
(農林水産省 HP から)

リスク1:近隣国での継続的な発生

今の日本にとってリスクが高まっていると考えられている理由の一つは東アジア、特に近隣国での発生が見られる点です。

口蹄疫は東アジア各地で毎年発生が見られ、韓国では令和 7 年に 19 件、今年は 7 月上旬までに 8 件の発生が見られています（図 1）。また、これまで東アジアでは見られなかった SAT 型の発生が見られるようになったこともリスク要因です。SAT 型の症状はバラツ

キが大きく、診断が難しいこと、またこれまで東アジアで使用していた 0 型や Asia1 型に対するワクチンは、SAT 型に効きにくいと言われています。

ランピースキン病は令和 6 年に日本に初上陸したことは記憶に新しいですが、口蹄疫と同様に東アジアで毎年発生が見られています。

リスク2:人流・物流の増加

もう一つのリスク要因は人流と物流の増加です。コロナ禍後、円安の後押しもあり、インバウンド旅行客数は過去最高を記録しています。また、空港の手荷物検査などで摘発された畜産物不合格品（肉製品・肉を含む加工品など）は件数・数量とも年々増加しています。空港、港湾施設などの水際での対策を継続していますが、近隣国での継続的な発生と相まって、日本への侵入リスクを押し上げています。

各農場における対策

各農場では病原体侵入防止のため、飼養衛生管理基準を遵守することが大切です。特に次のようなことを守りましょう。

1. 海外渡航等の自粛

口蹄疫の各国のステータスやランピースキン病の発生国等の情報は農林水産省の HP などで確認できます。やむを得ず渡航した場合は、帰国後1週間は衛生管理区域に入らない、衣類・靴を洗浄や消毒をするなどしましょう。

また、外国人従業員を受け入れている農場では、日本への持ち込みが禁止されている肉製品などを持ち込むことがないように再度、周知をしましょう。

2. 農場への病原体侵入の防止

衛生管理区域内に入る必要のない人が許可なく入らないように、「関係者以外立入禁止」の看板等を設置しましょう。

また、関係者が衛生管理区域に立入る際にも車両内外を消毒してもらいましょう。

3. 異常畜発見時の早期通報

飼養家畜に前述の「特徴的な症状」で述べたような症状が見られた場合や疑わしいと思った際には、迷わず診療獣医師や家畜保健衛生所に連絡してください。

これらの疾病が再度日本に侵入してくるリスクが上がっている今こそ、危機感をもって農場の病原体侵入対策を見直しましょう。

(井笠家畜保健衛生所)

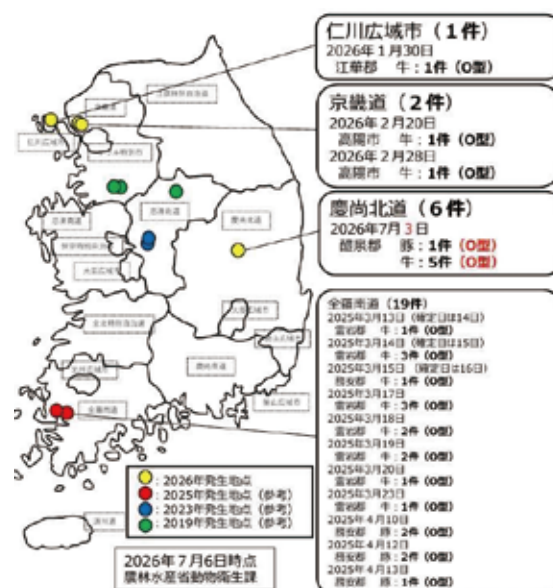


図1 韓国における口蹄疫の発生報告状況
(農林水産省 HP から)

豚熱ウイルスを持ったイノシシが 農場の近くにも生息しています

平成 30 年 9 月に国内の豚飼養農場で 26 年ぶりに豚熱が発生してから、26 都県で計 104 事例発生し、約 44.8 万頭が殺処分となりました（令和 8 年 6 月 23 日時点）。これまで豚熱発生農場では感染拡大防止のため全頭殺処分を行っていましたが、令和 8 年 5 月に家畜伝染病予防法が改正され、殺処分範囲が緩和されました。今後は国と協議の上で、症状が出ている豚やワクチンの免疫がない豚などに 限定し殺処分を行うことになります。

殺処分対象は変更されますが、豚飼養農場における豚熱発生のリスクは変わりません。今一度、豚熱拡大の原因である野生イノシシにおける豚熱発生状況と豚熱ウイルス対策を再確認しましょう。

野生イノシシにおける発生状況

豚熱感染状況把握を目的として、野生イノシシの全国サーベイランスを実施しています。これまでに北海道、千葉県、大分県、沖縄県を除く 43 都府県において、感染が確認されています（図 1）。

岡山県では、令和 6 年 2 月に野生イノシシでの感染が確認されて以降、これまでに 80 頭が陽性となっています（令和 8 年 6 月 23 日時点）。豚熱陽性が確認されたイノシシの発見・捕獲地点から半径 10km 圏内は感染確認区域となります。県内の感染確認区域は一部の地域（瀬戸内市、備前市、和気町など）を除き、ほぼ全域に広がっています（図 2）。

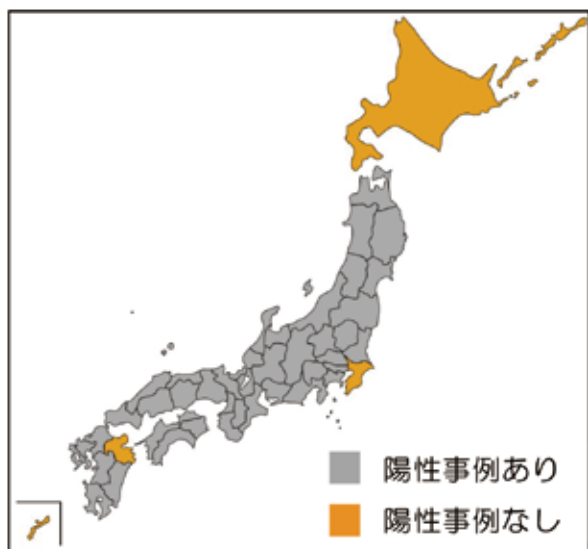


図1 野生イノシシ豚熱感染確認地域
(6月23日時点)



図2 岡山県内の野生イノシシ感染確認区域
(岡山県HPから、6月23日時点)

豚飼養農場における豚熱ウイルス対策

豚熱ウイルスを持ったイノシシだけでなく、ネズミやハエなどがイノシシ由来のウイルスを畜舎内に運んだり、農場周辺のウイルスが雨水とともに農場敷地内に流入するリスクも指摘されています。

豚熱予防対策として**適時、適切なワクチン接種**が重要です。ただ、ワクチン接種により全ての豚が免疫を獲得できるわけではなく、完全に感染を防げるものではありません。ウイルス侵入防止のためには、日頃からの**飼養衛生管理の徹底**が重要になってきますので、今一度確認しましょう。



図3 豚熱ウイルス侵入防止のための飼養衛生管理（農林水産省 HP から）

豚熱ウイルスの拡散防止にご協力をお願いします

豚熱ウイルスは、感染した野生イノシシの糞尿や死体などを通じて環境中に排出されます。環境中の豚熱ウイルスは、室温（20℃）では数日～2週間程度生存し、山林等の土壌や水を汚染します。

登山、キャンプ、狩猟などで山林に入る場合には、下山時に靴底や衣服の土を落とし、帰宅後は洗浄・消毒を行うなど、豚熱ウイルスの拡散防止にご協力をお願いします。



最後に

豚飼養農家の皆様には引き続き豚熱ウイルス対策を徹底していただくとともに、万が一、飼養豚に異状を確認した場合には、最寄りの家畜保健衛生所に早期 通報をお願いします。
（岡山家畜保健衛生所 家畜保健衛生課）

「ダニ」が拡げる蜜蜂の病気 ～蜜蜂の伝染病が増えています～



近年の蜜蜂をめぐる情勢

普段はあまり馴染みがないかもしれませんが、蜜蜂は蜂蜜の採取はもとより、受粉の役目を担っているため多くの農作物生産に欠かせず、私たちの豊かな食卓を支えています。近年、都市養蜂などの関心の高まりから蜜蜂を飼養する人が増えており、岡山県の飼養者数は、令和7年1月時点で全国第6位にランクインしています（農林水産省畜産振興課調べ）。

一方で、蜜源植物の減少や猛暑の影響、伝染病などにより蜂群減少の危機を迎えているのをご存じでしょうか。ここでは、蜜蜂に伝染病をもたらす大きな要因の一つである「ダニ」について紹介します。

津山家保管内でみられた「アカリンドニ症」

近年ニホンミツバチで広がっている「アカリンドニ症」とは、「アカリンドニ」という体長 0.2mm にも満たない微小なダニが、蜂同士の接触で気管に多数寄生して起こる病気です。飛べない蜂が増え、蜂群が崩壊することもあるので、家畜伝染病予防法の届出伝染病に指定されています。

令和7年10月、管内の蜜蜂飼養者から、「巣箱入口で成蜂が多数死亡しており、巣箱の中の蜂が激減している」と相談がありました。病性鑑定を実施したところ、生存した蜂のうち翅（はね）が閉じず飛翔できない蜂（写真1）が見られたほか、死亡した蜂の気管に大量のダニとその卵が詰まっている様子が見られ、気管閉塞が原因で死亡したと推察されました（写真2）。



写真1 翅が閉じず飛翔できない蜂

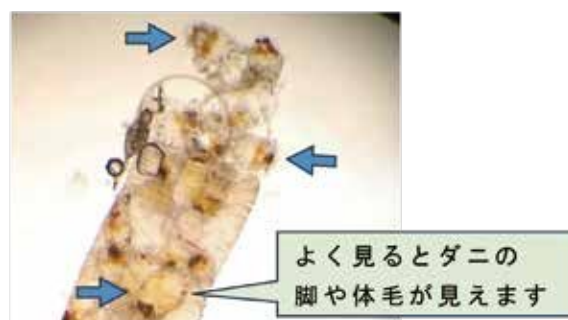


写真2 蜂の気管に寄生するダニ

このダニには化学製剤が効きづらく、メントールなどの精油が防除に使われています。揮発した成分が気管内のダニに有効で、忌避効果もあります。

ウイルスを運ぶヘギタダニによる「バロア症」

ダニは一般的に図のようなライフサイクルによって蜜蜂に病気をもたらします。蜂に大きな被害を与えるダニとして他にミツバチヘギタダニがありますが、このダニに寄生された蜂は弱体化や奇形、行動異常が増えるほか、ウイルスなどの感染症にもかかりやすくなり、死亡率も高くなります。雌の成ダニは平たいゴマ粒のような外観で、肉眼でも見える大きさです（写真3）。



写真3 ダニと死亡した蜂



図 ダニのライフサイクル

（日本養蜂協会「養蜂技術指導手引書 V」から）

この病気は「バロア症」と呼ばれており、農林水産省の統計によると近年の蜜蜂の届出対象伝染病のうち最多のものがバロア症でした。さらに、ミツバチヘギタダニはバロア症だけでなく、縮れ翅ウイルスや麻痺病ウイルスなど、多くのウイルスの運び屋となるため、蜜蜂に大きな被害を与えます。

防除にはダニにだけ効果が出る濃度に調整したフルバリネットやアミトラズなどの殺虫剤が使われますが、根本的な解決には巣箱全体の徹底した消毒が必要になります。

おわりに

今回ご紹介した他にも、蜜蜂では細菌やカビ類による伝染病も問題になっており、適切な管理を行わないと病気が広がってしまいます。伝染病が疑われる場合、最寄りの家畜保健衛生所へ連絡をお願いします。また、伝染病予防のため、県境をまたぐ巣箱の搬出入や、県内の移動（転飼）にも検査や書類提出が必要ですので、事前に家畜保健衛生所にお知らせください。なお、今後蜜蜂の飼養を検討される場合は、届出が必要なため、お近くの県民局までご相談ください。詳しい内容や最新情報にご興味のある方は、一般社団法人日本養蜂協会のウェブサイト（<https://beekeeping.or.jp/>）もご覧ください。

（津山家畜保健衛生所）

抵抗性牛を活用した牛伝染性リンパ腫対策

はじめに

牛伝染性リンパ腫（EBL）は、と畜場で発見された場合は全廃棄となるなど経済的損失の大きい伝染病であり、その発生頭数は増加傾向にあります。今回、畜産研究所で調査した新たな対策方法についてご紹介します。

EBLについて

牛伝染性リンパ腫（EBL）は、牛伝染性リンパ腫ウイルス（BLV）の感染により生じる病気で、一部の牛が発症に至ります。

EBL の発生頭数は全国的に増加傾向にあります。本県においても同様に、令和 7 年は 75 頭の発生が報告されています（図 1）。

EBL に対する有効なワクチンや治療法はなく、従来の対策としては、感染牛の隔離や淘汰、ウイルスを媒介する吸血昆虫の防除等が行われてきました。

今回、畜産研究所では、県内和牛における「抵抗性牛」を活用した感染防止対策について調査・研究を行いました。



図 1 EBL 発生頭数の推移

抵抗性牛とは

「抵抗性牛」は、近年存在が確認されたのですが、EBL 発症に対して遺伝的に抵抗性を示す牛のことです。

抵抗性牛は BLV に感染しても体内でウイルスが増えにくいため、EBL 発症に至りにくく、また他の牛への感染リスクが低いとされています（図 2）。

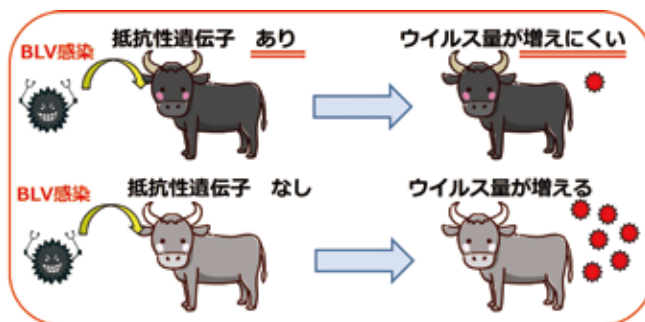


図 2 抵抗性牛（上段）の特徴

県内に抵抗性牛はいるのか

畜産研究所では、研究所を含む県内 8 農場 754 頭の黒毛和種繁殖雌牛を対象に、抵抗性牛かどうか遺伝子調査を実施しました。その結果、12 頭が抵抗性牛であり、

存在率は低いものの、県内和牛に抵抗性牛がいることが確認できました（表）。

表 抵抗性牛の調査結果

	研究所	A農場	B農場	C農場	D農場	E農場	F農場	G農場	合計
調査頭数 (頭)	116	26	32	203	68	84	89	136	754
抵抗性牛頭数 (頭)	2	1	0	6	1	1	0	1	12
存在率 (%)	1.72	3.85	0.00	2.96	1.47	1.19	0.00	0.74	1.59

実証試験

抵抗性牛による感染防止効果を確認するため、約 20 頭規模のつなぎ飼い式の和牛繁殖農家において、家畜保健衛生所と協力して実証試験を行いました。

写真に示したように、抵抗性牛を BLV 感染牛と非感染牛の間の壁として配置し、令和 7 年 3 月から 1 年間にわたり定期的に繁殖雌牛全頭の感染状況を調査しました。



写真 実証試験の様子

試験結果

感染率の高い農家での試験でしたが、試験終了まで抵抗性牛および非感染牛ともに非感染のままでした（図 3）。

1 年間という調査期間であり、詳細な検証には今後の経過確認が必要ではありますが、抵抗性牛を活用した水平感染防止の有効性が確認できました。

牛配置および 開始時の状況 (R7.3月)		直近の感染状況 (R8.3月)	
飼 槽	感染牛	→	
	感染牛	→	
	抵抗性牛 非感染	→	非感染のまま
	非感染牛	→	非感染のまま

図 3 試験結果

おわりに

感染牛の隔離など従来の対策が困難な農場において、抵抗性牛を活用した感染防止対策は有効と考えられます。

現状、抵抗性牛の存在率は低いですが、畜産研究所では抵抗性牛同士の交配を行うことで効率的に抵抗性牛を作出できることを確認しており、将来的な増頭に向けて取り組んでいます。また、県内で令和 7 年 7 月以降に登録された和牛雌牛に対して発行されている（公社）全国和牛登録協会の「和牛チップ DNA 情報活用報告書」では、抵抗性牛かどうか記載されています。ぜひ確認してみてください。（畜産研究所）